

古代日本語動詞の意味的タイプとヲ格標示との関係

九州女子大学 伊 土 耕 平[※]

1. はじめに

周知のように古代日本語においては、いわゆる目的語を表すヲ格が、標示されたりされなかつたりした。「竹ヲ取る……」と「竹 ϕ 取る……」のように（以下、ヲが標示される場合を「ヲ」、されない場合を「 ϕ 」で示す。「ヲ」は単に“格助詞ヲ”の意味でも使用する）。

どのような場合にヲとなり、どのような場合に ϕ となるか、その要因については、すでにいろいろと説がある。例えば、目的語であることを特に強調したい場合にヲとなる、人間を表す名詞であればヲとなる、“定”名詞であればヲとなる、等々。しかし、おそらくこの問題は、いくつかの要因が複雑に絡んでいるのであり、一つの説だけが正しく他の説はすべて間違い、というわけではない。

本稿は、“動詞の意味的タイプ”という要因を検討するのが目的である。つまり、ある種の動詞の場合はヲとなる率が高い、などと主張するのである。この問題は、これまでそれほど議論されてこなかった。しかし平安前期の散文作品を調査してみると、結論を先にすることになるが、知覚動詞・要求動詞などがヲが標示されることが多いのである。

もっとも、データ量がそれほど多くはないので、本稿ではあくまで“そのような可能性がある”という程度の主張しかできない。また、紙幅の都合により、ヲが多い動詞のみを取り上げることにし、 ϕ が多い動詞などについては別の機会にする。

2. 先行研究

本論に入る前に、先行研究を概観しておく。まず松尾（1944）が、動詞を100種ほどに分類して ϕ 対ヲに差がないか調査したが、とくに傾向はなかった、とする。しかし、動詞をどのように分類したかについては何も述べられていない。松尾は、動詞ではなく名詞が要因であるとして、ヲのつく名詞が①人に関する語、②代名詞、③「事」「由」、④準体言のとき、ヲが標示されると結論した。

松尾の言う①②④については、私の調査でも確かにヲが多かったが、③については必ずしもそうではなかった。それはともかく、動詞は ϕ 対ヲには無関係というのには従えない。

次に、Motohashi(1989)という研究がある。本稿に関係する部分だけを簡単にまとめれば、次のようになる（3章4「動詞のクラスから見たヲの選択」）。

[※]元奈良大学文学部助教授

- ①普通の他動詞＝他動性 (transitivity) によって ϕ / ヲ が決まる。例えば、目的語が人間・定名詞・単数などのとき、他動性が高くなるので ヲ が標示される。
- ②「別る」タイプ＝Bはソース（そこから心理的・物理的に離れる対象）であり、万葉集の例ではすべて ヲ が標示されている。他に「背く」「離る」など。
- ③「問ふ」タイプ＝Bはゴール（向かっていく対象）である。 ヲ が常に標示されるかどうかについては書かれていない。他に「祈る」「婚ふ」など。
- ④移動動詞＝Bはルート（通過する所）である。 ϕ 対 ヲ については書かれていない。

この論文は、日本語の格標示の史的变化を理論的に説明しようとしたものであり、 ϕ 対 ヲ が主なテーマというわけではない。②③については、私の調査でも ヲ 標示が多かった（ただし数は少ない）。しかし①の中にも ヲ が高率で標示される動詞がある、というのが本稿の主張である。

最近では、田中（1998）という研究がある。田中は『土佐日記』を調査し、次のような結果を得た（表記を本稿と同じものに改める）。

- ① ヲ と ϕ とでは、述語の意味のありように差異が認められる。
 - ② ヲ の方には知覚を表す動詞がとくに多く、心情も比較的多い。
 - ③ ϕ の方には、 ヲ に比べ、接触や授受を表す動詞が多い。
- ②と③から、次のように言う。
- ④ ヲ による対象化は、知覚や心情といった心理的・内的な作用により、助詞を用いない場合は、接触や授受などの物理的・外的な働きかけによる、という傾向が認められる。

②については、本稿でも同じような結果を得た。しかし、「知覚」「心情」以外にも ヲ が多い動詞はある。③については、授受動詞はたしかに ϕ が多かったが、接触動詞はそうではなかった。また、④のようなまとめかたがよいのかどうかは疑問である（後述）。調査範囲が狭いという問題もある。しかし、②のような指摘は、管見のかぎり田中が最初である。この点を高く評価したい。

言うまでもなく、古代語の格助詞についての研究は数多いが、動詞の意味的タイプと ϕ 対 ヲ の相関について言及した研究は、管見のかぎりでは、上の三研究だけである。しかし、この問題は、さらに調査する必要があると考える。次節で、私の行なった調査の対象と方法について述べよう。

3. 調査の対象と方法

調査の対象としたのは『竹取物語』『伊勢物語』『土佐日記』『蜻蛉日記』『古今和歌集』『後撰和歌集』の六作品である。いずれも『新日本古典文学大系』（岩波書店）のものをテキストにした（以下、作品名は「竹取」「竹」などと略記する）。

したがって、「古代語」とは題したが、この範囲（平安前期）である。和文の散文資料としてはもっとも古い時期のほうに属するもの、というつもりである。また、ジャンルの偏りがないようにもした。

竹取は室町時代を遡る伝本がないなどの問題もあるが（森野1981）、いずれも一度は調べてみるべき作品であり、調査の手始めに選ぶ作品としては妥当であると考え。また、例えば、伊勢は諸本によってヲの標示／非標示に差がある、などの問題もある（山口1987）。結局本稿の調査は、前記六作品について新大系本を見る限り、という限定されたものである。

それぞれの作品の中では「層」を区別する。「層」とは、歌・地の文・会話文・手紙文・詞書などの区別を言うことにする。各層のうち、歌と、あまりにデータ量の少ないものは対象からはずした。結局、本稿で調査対象とした作品および層別は、次のとおりである。

- ①竹取の地の文（「竹地」と略記）
- ②竹取の会話文（「竹会」　ク　）
- ③伊勢の地の文（「伊地」　ク　）
- ④土佐の地の文（「土地」　ク　）
- ⑤蜻蛉の地の文（「蜻地」　ク　。手紙文を含む）
- ⑥蜻蛉の会話文（「蜻会」　ク　）
- ⑦古今の詞書（「古詞」　ク　。「仮名序」は含まない）
- ⑧後撰の詞書（「後詞」　ク　）

以下に、例えば「伊勢に1例しかない」などと言う場合、あくまで伊勢の上の範囲に1例という意味である。

歌を除外したわけは、 ϕ 対ヲが「調整可能な事象として扱われてしまう」（金水1993）からである。また、⑤蜻蛉の地の文だけ手紙文を含めたが、蜻蛉では地の文と会話文とで ϕ ／ヲの分布に関して有意差がなかったからである。

次に、具体的な作業について述べる。まず、上の作品・層の中からヲと ϕ の例を一つ一つ拾っていき、データベースを作る。ただし、次のようなものは採らないことにした。

- ①係助詞・副助詞のついているもの
例) 花ヲも見る。花 ϕ は見る。
- ②「題 ϕ 知らず」「詠み人 ϕ 知らず」
- ③サ変動詞
例) 返事 ϕ す。いそぎ ϕ す。
- ④「物」
例) 物 ϕ 見て……。物 ϕ 思ふ。
- ⑤準体句

例) 花の散るヲ見て詠める。

⑥代名詞

例) これヲ見て……。君ヲ思ふ。

採らない理由を簡単に述べれば、①は例えば「花ヲしぞ思ふ」と言う場合、このヲは「しぞ」の強調に引かれて付けられたとも考えられる。逆に、例えば「は」は、ヲと両立せず、ヲを消してしまうことが多い(ヲバという形もあることはあるが)。要するに、係助詞や副助詞は、ヲの標示／非標示に何らかの影響を及ぼすと考えられるのである。②の「題 ϕ 知らず」と「詠み人 ϕ 知らず」は、合計すると500例以上もあり、統計量をゆがめてしまう恐れがある。③のサ変と④の「物」は ϕ であることが圧倒的に多く、これも統計量をゆがめてしまう。⑤の準体句と⑥の代名詞は、逆にヲであることが圧倒的に多く(先述の松尾の結論)、これも統計量をゆがめてしまう。③～⑥に関しては、具体的なデータを示すべきかもしれないが、ここでは省略する。

データベース作成の次は、動詞の分類である。ヲ格をとる動詞の意味分類としては、現代語に関してであるが、奥田(1960)、同(1968)が基本的なものである。本稿でも基本的な考え方は奥田に従う。すなわち、「AガBヲCニ(カラ、へ、トなども)Vスル」という文型で言えば、AがBに直接働きかけてBが変化する、という場合を典型的な他動詞と考えるのである。

具体的にはコード表を作るわけであるが、まず大綱を示そう。なお、古代語では自動詞と他動詞が同形のものなどがあるので、例は現代語で示す(一部古代語)。

10番代 AがBに直接的に働きかけ、Bが質的・位置的に変化する。

例) 花ヲ折る。人ヲ殺す。枝ヲ挿す。酒ヲ飲む。笛ヲ吹く。

20番代 AがBに(命令などにより)間接的に働きかけ、Bが質的・位置的に変化する。Bは人や人の動かす乗物など。

例) 人ヲ呼ぶ。車ヲ寄せる。人ヲ慰める。

30番代 AがBに取り組む。つまり、Bは結果的に生ずる事物であり、Aが働きかけるのは、実際にはB以外の人や物である。

例) 禊ヲ行なう。家ヲ作る。歌ヲ詠む。

40番代 遣り貰い。つまり、AはBの所有権をCに／からやったりもらったりする。

例) 物ヲ奉る。文ヲ遣る。物ヲいただく。

50番代 態度表明。AがBに対してある態度を表明する。Bは人間の場合と事物の場合がある。

例) 神ヲ祈る。人ヲ求婚する。人ヲ待つ。人／事ヲ誉める。暇ヲ乞う。

60番代 表現理解活動。BはAの表現理解の対象。

例) 山ヲ詠む。景色ヲ見る。事ヲ考える。BヲCと思う。

70番代 感情。BはAが感情を持つ対象。

例) 人ヲ恋う。人ヲ恋しく思う。物ヲ求める。

80番代 空間的・時間的移動。Bは通過する場所・時間あるいは離れる起点など。

例) 関ヲ通る。家ヲ離れる。時ヲ経る。年ヲ越える。

99番 その他。上に入らないものすべて。

一つ注意するが、同じ動詞でも別々のところに分類されることがある。例えば「詠む」という動詞は、Bが「歌」など表現作品であれば30番代、「山」など表現される対象であれば60番代となる。

次に細分類を示す。ただし紙幅の都合により、本稿の結論に関係のあるものだけにする。すなわち、50～70番代（合計14項目）である。

50番代 態度表明

51 要求的態度。B=人。Bに対して何かを要求する。

例) 神／人ヲ祈る／頼む／念ずる。人ヲ語らう／咎める／婚う。

52 要求的態度。B=物事。人に対してBを要求する。

例) 文ヲ召す。暇を乞う／言う。事ヲ許す。

55 非要求的態度。Bに対する態度を行為によって示す。

例) 人ヲ訪ねる／招く／待つ／見送る／守る。

56 非要求的態度。評価的・表現的態度。

例) 人ヲ誉める／叱る／誇る。

57 非要求的態度。意志表明。

例) 事ヲ定める／承知する／受入れる。茶ヲ断つ。人ヲ否ぶ／背く。

60番代 表現理解活動

61 B=表現題材。

例) 昔の事ヲ話す／言う／書く。山ヲ詠む／絵に書く。

62 知覚。

例) 景色ヲ見る／見つける。音ヲ聞く。香ヲかぐ。

63 知的理解。

例) Bヲ知る／数える／試みる。事ヲ考える。話ヲ聞く。文ヲ読む／見る。

64 思考。判断。

例) BヲCと見なす／思う／知る／間違える。BヲCと比べる。

65 記憶。

例) Bヲ覚えている／思い出す／忘れる。

66 伝達。

例) 事ヲ人に伝える／指示する。物ヲ見せる。

70番代 感情

71 感情。

例) 人／物ヲ恋う／思う／偲ぶ／忌む／恨む。

72 感情的認識。

例) Bヲ恋しく思う。

73 志向。

例) Bヲ目指す／探る／欲しがる。

これらの分類コードは、何回かの試行の結果出来上がったものである。すなわち、 ϕ 対ヲの要因を探るという目的をにらみつつ、理論的に考えて分類の枠組を作る→データを実際に分類してみて枠組を修正する、の繰返しの結果出来上がったのである。当然他の分類方法もありうる。例えば酒井(1990)のような、他動性を尺度としたすっきりとした分類もよいかもしれない。本稿の分類は、まだ完璧とは言いがたい。

次に、実際の用例一つ一つ(=データベースの1レコード)にコード番号を振っていく。実際の用例の中には、どの分類に入れればよいか迷うものも少なくないが、そのような場合はあまり無理をせず、99「その他」に入れた。

最後に、作品別・層別に集計し、ヲの使用率の高いものと ϕ の使用率の高いものを明らかにするわけである。

4. 調査結果

問題は、動詞のコード別に見て、 ϕ 対ヲに差があるかどうかである。しかも、作品ごとにヲの使用率が異なるのであるから、作品別に集計するのが理想である。

ここでは、紙幅の都合上、ある程度用例数があり、かつヲの標示率が高かったもの、だけを紹介することにする。具体的には、「62.知覚動詞」「63.知的理解動詞」「64.思考動詞」「71.感情動詞」「51.要求動詞」「73.志向動詞」の六タイプである(データ量の多い順。一部コード順)。以下、コード番号ではなく、これらの動詞の名前を使うことにする。

作品別・動詞別に ϕ 対ヲの数をまとめると別表のようになる。表の最下段には作品別に見た ϕ 対ヲの数とヲの割合を示しているので、そこから、ヲの使用率は竹地・竹会・古詞で高く、蜻地・蜻会で低い、六作品全体の平均ではヲがやや多い、などのことがわかる。

以下、動詞別に具体例を掲げ、検討していきたい。なお、以下において「16対20」などの言い方をすることがあるが、それらはすべて「 ϕ の個数」対「ヲの個数」の意である。

4.1 知覚動詞

これは、「見る」「見遣る」「見付く」「見出す(=中から外を見る)」「見置く」「眺む」「眺遣る」「まほる」「まほり交す」と「(音を)聞く」という、単純な感覚的理解を表す動詞

別表 作品別・動詞別集計（*＝5%未満の危険率で有意。本文参照）

	竹地	竹会	伊地	土地	蜻地	蜻会	古詞	後詞	計(ヲ%)
知覚動詞 φ		3	2		8	2	7	7	29
ヲ	11*	4	10	8*	26*	2	23*	23	107 (78.7)
知覚理解 φ			2	1	11			2	16
ヲ	7	3	4	3	9	2*		2	30 (65.2)
思考動詞 φ		2			4				6
ヲ	1	1	4	3	9*		5	2	25 (80.6)
感情動詞 φ			1	1	1	1	3	4	11
ヲ	2	2	9*	3	1		2	8	27 (71.1)
要求動詞 φ									0
ヲ	1		6*	3	6*			6*	22 (100.0)
志向動詞 φ			2			1			3
ヲ	1		1	6*	4*	1		2	15 (83.3)
作品・層 φ 全体	51	47	83	51	269	58	70	152	781
ヲ	118	78	104	62	182	21	114	194	873 (52.8)
ヲ%	69.8	62.4	55.6	54.9	40.4	26.6	62.0	56.1	52.8
合計	169	125	187	113	451	79	184	346	1654

である（今回の調査に出現した語をすべて（敬語形やアスペクト形式が付加したものは除く）記す。以下の動詞についても同様）。もっとも、「眺む」「眺遣る」などは、単純に“見る”意だけではなく、その点問題だが。

六作品全体で「見る」類が125例、「聞く」が11例で、計136例あった。うち107例（78.7%）でヲが標示されている（表の右端を参照）。

作品別に見ても、どれもヲのほうが多い。表では、カイ二乗検定をして5%未満の危険率で有意となったものに*を付けてある（例えば、竹地の知覚動詞はφ対ヲが0対11だが、それは竹地全体の51対118に対して有意差がある）。それを見ると半分の作品で有意となっている。竹会と蜻会だけ差がないが、数が少ないのであまり重要視しないでよかろう。知覚動詞はヲ標示の率が高い。

ヲの例を掲げておこう。用例には、作品・層別・所在を示す。所在は、古今と後撰は国歌大観番号、それ以外はテキストのページ（左3桁）と行数（右2桁）で示す。「……」

は私による省略である。テキストは、都合により表記を一部改める。

- (1)人間にも月ヲ見ては、いみじく泣き給ふ（竹地06002）
- (2)男の隠れて女ヲ見たりければ、（後詞1153）
- (3)とほ山ヲながめやれば、（蜻地16514）
- (4)雁の声ヲ聞きて、（古詞30）

他方、 ϕ 標示は29例だが、主なものを三種に分類して掲げよう。

①「見に」

- (5)春、花 ϕ 見に出でたりけるに、（後詞99）
- (6)祭 ϕ 見に出でたれば、（蜻地07813）
- (7)仁和帝……布留の滝 ϕ 御覧じにおはしまして（古詞396）

②意志表現

- (8)女ども、花 ϕ 見むとて、（後詞112）
- (9)この貝、顔 ϕ 見ん（竹会04804）

③連体修飾節内

- (10)女車、紅葉 ϕ 見けるついでに（蜻地10706）
- (11)法皇、宮の滝といふ所 ϕ 御覧じける、御供にて（後詞1356）

④その他

①の「花 ϕ 見に」は、「花見」で一つの複合語と考えることも可能である（参考『(小学館)古語大辞典』など）。要するに「花」と「見る」との間が密接なのである。「祭 ϕ 見に」「滝 ϕ 見に」も、構文上は似たようなところがある。②③は、データは省略するが、すべての動詞で ϕ である率が高い。②意志表現は簡潔さが要求されること、③連体節は節内部の緊密度を高める（まとまりをつける）ため、 ϕ のほうが多く使用されると考える。とすれば文法的な問題ではなく、文体上の問題である。数は、①②③合わせて22例あり、知覚動詞の ϕ の例の76%を占める。要するに、知覚動詞の ϕ の例は、 ϕ である必要が別にある“例外的”なものが多いと言える。

以上のことから、知覚動詞は ϕ 標示が原則であると考えられる。先述の田中説と同じである。

4.2 知的理解動詞

これは「知る」「思知る」「(心/文を)見る(=知る/読む)」「(話を)聞く」「見聞く」という、知覚動詞に比べて、高度な理解をするという意味の動詞である。

まずは ϕ 標示の例を掲げる。

- (12)玉の取りがたかりし事ヲ知り給へればなん、勘当あらじとて、（竹会04005）
- (13)さるさがなきえびす心ヲ見ては、いかゞはせんは。（伊地09408）
- (14)かゝる身の果てヲ見聞かん人……（蜻地13508）

知的理解動詞は、知覚動詞の高度なものと考えれば、ヲ標示となりそうだが、ヲの例は、六作品全体で65%と、あまり多くない。しかし蜻蛉だけがφが多く、全体のヲの率を下げているという側面がある。蜻蛉のデータを除くと、5対19で、ヲの割合が79%に上がる。

次にφの例を挙げよう。

(15)心ばへφ知りたる人の、(蜻地11912)

(16)せん方φ知らずあやしきおきどころなきを、(蜻地11205)

(17)女、歌よむ人なりければ、心φ見むとて、(伊地09802)

(18)あひ知りて侍りける人のもとに、「返事φ見む」とてつかはしける(後詞510)

(15)(16)のような「知る／らず」は8例(φの例の半数)あるが、(16)などは慣用句な固定的な表現と言えそうである。(17)(18)は先述の意志表現である。とすれば、前項の知覚動詞と同じく、φの例を特殊なものとも考えることもできる。よって、このタイプもヲが標示される率が高いと考える。

4.3 思考動詞

これは「(事を)思ふ」「思遣る」「思成す」「思定む」「眺思ふ」「念ず」という、頭の中でいろいろ考える、また、何かを判断する、という意味の動詞である。知覚動詞、知的理解動詞に比べ、さらに高度な精神作用のように思われる。

このタイプの動詞は、ヲ標示が六作品全体で81%と、高率である。ヲの例から掲げよう。

(19)にはかにかゝる事ヲ思ふに、(蜻地11912)

(20)今日は白馬ヲ思へど、かひなし。(土地00806)

(21)そのをとこ、身ヲえうなき物に思なして、(伊地08703)

(22)また弓のことヲ念ずるに、(蜻地10907)

(21)はいわゆる“認識構文”である(後述)。

φの例には、次のようなものがある。

(23)あが仏、何事φ思ひたまふぞ。(竹会06106)

(24)今日まして思こゝろφおしはからなん。(蜻地13008)

この思考動詞のデータのうち有意差があったのは蜻蛉だけであるが、φとヲの分布を全体的に見て、ヲ標示の可能性が高いと判断したい。

4.4 感情動詞

これは「惜しむ」「(人を)思ふ(=恋ふ)」「好む」「恋ふ」「(思ひ)嘆く」「恨む」「思煩ふ」「哀れがる」「厭ふ」「思倦む」「思悔る」「思憂ず」という、Bに対してある感情を持つという意味の動詞である。

このタイプは、ヲ標示が六作品全体で71%である。まずヲ標示の例を挙げておこう。

(25)春ヲ惜しみて、よめる (古詞130)

(26)昔、若きをとこ、異しうはあらぬ女ヲ思ひけり。(伊地11801)

(27)たち別れなむことヲ、……嘆かしがりけり。(竹地06406)

(28)時に遇はずして、身ヲ恨みて籠り侍ける時 (後詞1245)

なお、次のような「BヲCト／ク／ニ思ふ」という例がある。

(29)翁ヲ「いとほしく、かなし」とおぼしつる事も失せぬ。(竹地07412)

(30)深草に住みける女ヲ、やうやうあきがたにや思けん、(伊地19204)

これらもいわゆる認識構文で、感情動詞の数には入れていない(「72.感情的認識」に入れた)。もしこれらも入れてよいのであれば(「悲しと思す」など全体で一つの感情動詞と考えるわけである)、これらは11例すべてヲなので、11対38になる。ヲが78%と、さらに高率になる。

他方、 ϕ の例は「惜しむ」が多い。

(31)かの国人、馬のはなむけし、別れ ϕ 惜しみて、(土地01706)

(32)帰りがてにして別れ ϕ 惜しみけるに (古詞388)

(33)かれこれ花 ϕ 惜しみける所にて (後詞95)

(34)命 ϕ をしむと人に見えずもありにしがなとのみ念ずれど、(蜻地09813)

「惜しむ」は ϕ の例11例のうち7例を占める。とくに「別れ ϕ 惜しむ」(4例)というのは固定的な表現のようである。他には「事 ϕ 好む」が2例あり、これも固定的な表現である。特定の動詞が多かったり、固定的表現であったり、 ϕ の例はむしろ特殊であることから、感情動詞もヲ標示の可能性が高いと判断する。これも田中説と同じである。

4.5 要求動詞

これは「言ふ／相言ふ／言入る／語らふ(=以上、求婚する意)」「祈る」「(仏を)念ず」「頼む」「婚ふ(あふ／よばふ)」「制す」で、B(人や神)に対して何らかの依頼的・要求的な態度を表すという意味の動詞である。コード表50番代の「態度表明動詞」のうち、人に対して依頼的・要求的態度を表すものを特立したわけである。依頼的・要求的であれば、Bに対する心理的な志向作用が、より強いのではないかと考えたのである(志向動詞との違いについては後述する)。なお、Motohashiの言う「問ふタイプ」の動詞(B=ゴールのもの)は、ここに含まれる。もっとも「問ふタイプ」の外延はそれほど明確ではない。「B=ゴール」というのが条件であれば、次項の志向動詞も入るであろう。

(35)女ヲとかくいふこと月日経にけり。(伊地17301)

(36)異人ヲあひかたらふと聞きてつかはしける (後詞1283)

(37)日一日、夜もすがら、神仏ヲ祈る。(土地02315)

(38)すだれヲたのみたるものども我か人かにて…… (蜻地21410)

(38)だけ「簾」で、人ではないが、擬人的な表現と考えることができる。

数は多くはないが、すべてヲが標示されている。有意差の出た作品が多いことも考えて、要求動詞はヲ標示が多いと考える。

4.6 志向動詞

これは「求む」「追ふ(=目指す)」「指す(=目指す)」「(便りを)尋ぬ」「(機会を)窺ふ」「探る」である。Bは物や所であり、それをAが探し求めたり目指したりするのである。前項の要求動詞も志向作用を含むが、それが主ではない。例えば「女を語らふ」と言う場合、Aの気持ちが女に向いているのは確かだが(つまり志向作用)、それが「語らふ」の意味の中心なのではない。それに対してこちらの志向動詞は、気持ちの方向性がより明確である。そしてこちらは、Bが人ではないし、依頼的・要求的側面もない。もちろん、態度を表明するわけでもない。

例を掲げよう。

(39)枇杷左大臣、用侍て、櫛の葉ヲ求め侍ければ、(後詞1182)

(40)……大湊より、奈半の泊ヲ追はむ、とて、漕ぎ出でけり。(土地01009)

(41)三笠山ヲさして行くかひもなく、(蜻地16205)

このタイプの動詞も、数は少ない(18例)が、83%にヲが標示されている。ヲ標示の可能性が高いと判断したい。

5. 結論と補足

以上のことから、知覚動詞・要求動詞はヲ標示が高率であったと結論する。知的理解動詞・思考動詞・感情動詞・志向動詞も、完全に実証することはできなかったが、その可能性は高いと思われる。今後さらに調査したい。

これらの動詞に共通することは、B(対象)に対して直接働きかけるのではないことである。奥田の言葉で言えば、「はたらきかけ」ではなく「かかわり」を表す動詞である。具体的な働きかけを意味として持つ動詞が典型的な他動詞であるとするれば、知覚動詞などは典型的でない他動詞である。このような働きかけ性を持たない動詞から優先的にヲが標示されたのだとするれば、要するに、これらの動詞は、言わば働きかけ性が弱いのでヲによって補われることが必要だったということになる。これは興味深いことである。しかし、動詞全体のデータを見てこのように言えるかと言え、まだまだこのように断言することはできない。今後さらに調査する必要がある。

また、他の要因も加味する必要がある。例えば、先に述べた、Bが人間を表す名詞である場合や定名詞である場合なども、私の調査でも、ヲ標示の傾向が多少見られた。よって厳密に判断するのであれば、これらの要因も考慮すべきである。今後の課題としたい。

なお、現代語に関して“認識構文”の議論がある（三原1994:115-127など）。本稿に関係のある部分だけを取り上げると、「BヲCト思ふ」などの構文において、ヲが省略できないと言うのである。結論から言えば、本稿のデータにおいても、このような構文ではすべての例においてヲが標示されていた（コード64の一部と72全部。詳細は省略）。かなり古くから、このような構文ではヲが標示されていたことになる。この点も興味深い。

ヲが高率で標示されると見られる動詞は、調査範囲を広げてデータ量を増やせば、さらに発見できるかもしれない。逆に、 \emptyset 標示が多い動詞もある。それらについては、別の機会に述べることにする。

引用文献

- 奥田靖雄（1960）「を格のかたちをとる名詞と動詞のくみあわせ」（言語学研究会編『日本語文法・連語論（資料編）』（むぎ書房、1983）に再録のものによる）
——（1968）「を格の名詞と動詞のくみあわせ」（同上）
- 金水 敏（1993）「古典語の『ヲ』について」仁田義雄編『日本語の格をめぐって』くろしお出版
- 酒井峰男（1990）「他動性による動詞の分類」『（名古屋大学日本語学科）日本語教育論集』1
- 田中牧郎（1998）「レポート③」青葉ことばの会編『日本語研究法〔古代語編〕』おうふう
- 松尾 拾（1944）「客語表示の助詞『を』に就いて」橋本博士還暦記念会編『橋本博士還暦記念国語学論集』岩波書店
- 三原健一（1994）『日本語の統語構造』松柏社
- 森野宗明（1981）「中古語」川端善明他編『講座日本語学 3 現代文法との史的対照』明治書院
- 山口仲美（1987）「伊勢物語の文法」山口明徳編『国文法講座 4 時代と文法——古代語』明治書院
- Motohashi, Tatsushi（1989）*Case Theory and the History of the Japanese Language*.
Doctoral Dissertation, The University of Arizona.